三鬼（さんき）

三島屋変調百物語四之続

目次

序 5

第一話 迷いの旅籠 7

第二話 食客ひだる神 191

第三話 三鬼 291

第四話 おくらさま 419

装幀　芦澤泰偉＋五十嵐徹
装画・挿画　北村さゆり
題字　北村宗介

序

三島屋は、江戸は神田、筋違御門先の一角にある袋物屋である。主人の伊兵衛とおかみのお民が夫婦二人で心を合わせ、律儀に働いて興した店だが、今では袋物屋のふたつの老舗、池之端仲町の越川、本町二丁目の丸角に続く名店として、江戸の洒落者たちの人気を集めるようになった。

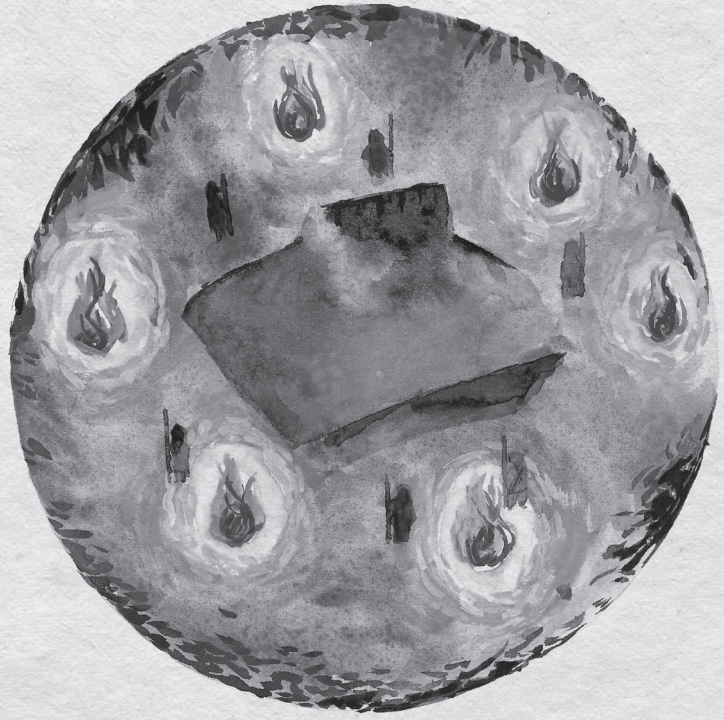
三島屋の夫婦には息子が二人いるが、どちらも元服するとすぐ、他店の釜の飯を食ってみるようにと、家を出された。その代わりのように、二年前の秋口から、伊兵衛の姪のおちかという娘が住むようになった。

世間の目からは三島屋のお嬢さんであるおちかだが、お店のなかでは女中のおしま、お勝と同じようにきりきり立ち働いている。同時に、伊兵衛より直々の命を受けて、ある役目をこなしている。三島屋の客間〈黒白の間〉に、一度に一人の語り手を招き入れては、その人の口から不思議な話や恐ろしい話を聞き出すという役目である。

怪談語りの〈百物語〉という趣向は、巷に珍しいものではない。粋人たちのあいだでは、それ

第一話

迷いの旅籠



は娯楽の場であり、社交のきっかけである。耳学問の道場でもある。

ただ、幾人かが集まって順番に語り、その話に皆で耳を傾けるのではなく、語り手は一人、相対する聞き手もおちか一人という三島屋のやり方は変わっている。さらに伊兵衛が、せっかくならばよりぬきの面白い話を聞き集めようと、張り切ってあちこちに手を回したものだから、これはたちまち話題になった。語り手を募り、事前にその人品骨柄を見定めてもらうため、灯庵（とうあん）という手練（てだ）れの口入屋（くちいれや）をあいだに入れているのだが、その灯庵老人も呆（あき）れるほどの評判だ。

人は語りたがる。己（おのれ）の話を。

だがそれは時に、その人生の一端に染みついて離れぬ何かを他者に見せることにほかならぬ。多くの耳に触れ回りたくはない。しかし一度は口に出して吐き出してしまわねば、その何かを墓の下まで持って行くのはどうにも辛（つら）い。その何かが、いざとなったら墓石の下に収まらないかもしれぬという不安が胸を塞ぐ。

だから、三島屋の変わり百物語は人を集める。

そこに難しい決まり事はない。聞いて聞き捨て、語って語り捨て。ただそれだけだ。

今日もまた一人、黒白の間に新しい客が来る。

子供である。
江戸に来て歳をふたつ加え、十九になったおちかの目にはまだ子供にしか見えない女の子だ。歳は十二、三というところだろう。
三島屋の仕事場に住み込みの縫い子たちのなかにも、そのくらいの子がいる。この変わり百物語のおかげで友達になった、本所亀沢町に住むいたずら三人組の男の子たちも、しょっちゅう使い走りや子守や薪集めなどをしてお駄賃を稼いでいる。幼い子供が働くということは、おちかにとっても珍しくはない。
ただ、この黒白の間の語り手として、子供が最初から一人で来るのは初めてのことだ。
当の語り手の方も、来客として遇され、床の間を背にして座るなど生まれて初めてなのだろう。どう勧めても遠慮する。軽い押し問答になった。
「どうぞ、お嬢さんがこちらへお座りくだせえ」
「でも、わたしはそれだと普段と勝手が違って、うまくお話の聞き手を務められないの」
「そんでもどうぞ、どうぞ」
「あなたはここではお客様だから、そこに座ってもらってかまわないのよ」
そのうちに、唐紙の向こうの次の間でお勝が笑い出し、割って入って宥めてくれた。
「笑ったりしてごめんなさい。わたしは女中の勝といいます。こんなところに隠れていて、びっくりさせてしまったでしょう」

お勝は黒髪豊かな柳腰の美女なのだが、その整った顔に、疱瘡にかかった痕のあばたがたくさん残っている。これは疱瘡神という強い疫神に愛でられた証であり、だからお勝は、かの神の守護により魔を祓う力を身につけているのだ。
お勝はそういうことを自分でざっと語り、優しい声音でこう続けた。
「この黒白の間では、怖い話や不思議なお話ばかりが語られますから、どうかすると悪いものや邪なものが寄りついてくるかもしれません。そんなときのために、わたしがお隣にいて張り番をしているんですよ」
ここでお勝は、着物の胸のあたりをとんと打ってみせた。
「わたしがいる限りは、何も怪しいことは起こりません。大船に乗った心地でいてくださいな」
「へえ……おおぶねぇ」
語り手の女の子は、ぽかんとしたようにそう繰り返す。
「はい、ここは大船のなか。そして三島屋のお嬢さんが船頭さんです」
お勝は軽くおちかの肩に手を置いた。
「船頭さんは船のともにいるものですよ。そうでないと前へ進めませんからね。それはあなたもおわかりよね」
女の子は慌ててこっくりした。「へ、へえ」
「では船頭さん」
お勝はにこやかにおちかの顔を覗き込む。
「今日のお客様は船に乗り慣れていないので、揺れが怖いんだそうでございますよ。もっと近く

に寄っていただいて、船頭さんのお顔をそばで見ていられたら、きっと心丈夫でしょう」
そして上座の座布団をするりと手前に引き寄せ、さらに縁側に面した雪見障子のそばへとずらしてみせた。
「あら、そうね」
おちかも得心がいって、にっこり笑った。自分の座布団をそこに寄り添うように近づける。
「これならどうかしら」
語り手の女の子は目をまん丸にしている。
ちょうどそこへ、もう一人の女中のおしまが茶菓を運んで来た。
「おしまさん、こっちへちょうだい」
二枚の座布団が座敷の障子ぎわにくっつけられている眺めに、おしまは一瞬、何事かという顔をした。が、こちらも心得たものだ。はいはいと盆を持ってくる。香ばしいほうじ茶と茶饅頭が載っている。おちかの傍らの火鉢の上では、鉄瓶がその口からほのかな湯気をたてている。
「今日は風が冷たいのがあいにくでしたねえ」
「そうね。障子を開けてお庭が見られたら、もっと気分がいいでしょうに」
「お雛様をしまって、さあ次はお花見の算段をしようかという頃合いになって、きまって北風の吹き返しがくるのはどうしてでしょうか」
三島屋ではつい昨日、雛飾りを片付けたのだ。一緒に飾っていた桃の枝はまだ満開の花をつけているので、花器を替えてここの床の間に置いてある。触れれば花びらがこぼれそうだ。
おちかと女中たちのやりとりに、語り手の女の子はますます目を瞠っていたが、ついと首を縮めて呟いた。
「あいすみません」
自分が言うことをきかないので、かえって手間をかけさせてしまった——と思ったのだろう。聡い子である。
「さ、これでお膳立てはできました」
お勝が畳に軽く手をついて立ち上がる。おしまもしとやかに一礼して引き下がる。
おちかは自分が先に座布団の上へ座ると、明るい障子の方へ顔を向けた。
「うちは袋物屋だから、縫い物をする職人さんや、縫い子さんがいるの。おじいさんから、おばさん、あなたぐらいの歳の子まで、二十人くらい」
彼らはお店ではなく、近くにある仕事場で働いている。そこに住み込んでいる者もいる。仕事場の内々のことはおかみのお民が仕切り、独立した形になっているので、お店の方はおちかも入れて三人の女手で切り盛りできるのだ。
だが年明けからこっち、おちかは暇を盗んで仕事場へ顔を出すようになった。裁縫を習うためである。
「わたしも実家でひととおりは習ってきたけれど、てんで無手勝流だから、商い物を縫うような腕前にはほど遠いのよ。一から習い直しでね。そういうときは、縫い子さんたちの邪魔にならないように、仕事場の隅っこで、障子のそばの明るいところに引っ込んで、ちくちく、ちくちく」
おちかが針を使う仕草をしてみせると、語り手の女の子の頬が、やっと緩んだ。
「お嬢さんは、ずっと三島屋さんにお住まいではねえんですか」

「うん。江戸に出て来て、やっと二年よ。わたしの実家は川崎宿で旅籠をしているの」
「え、旅籠？」
女の子の驚きように、おちかも吃驚した。
「そうよ。珍しい？」
「そうでなくって――えっと、あのぉ」
指をもじもじさせる。
「名主様がおらに、三島屋さん行ってお話ししてこいっておっしゃってるのが、旅籠のことなんで」
「まあ、旅籠にまつわるお話は初めてだわ」
土の匂いがしそうな素朴な女の子が語りに来たというだけでも興味をそそられるのに、いっそう面白くなってきた。
「どうぞ、こっちに来て座って、聞かせてちょうだい」
女の子は畳に手をついて頭を下げると、身を小さくして座布団に乗った。素朴ではあるけれど、きちんと躾けられている子だ。
「お名前は？」
「つぎと申します」
「おつぎちゃんね。あらためまして、わたしが三島屋のおちかです。主人の伊兵衛の姪にあたります。どうぞよろしくお願いしますね」
おつぎの髪形は少女らしく可愛い結綿だが、髪飾りも手絡もなく、白紙を結んであるだけだ。

黒襟をかけた格子縞の玉紬に、黒繻子の昼夜帯を締めている。着物の袖は短い。奉公人の身なりである。が、全体にこざっぱりとしているし、着物の格子縞は翁格子だ。大きな格子のなかに小さな格子をいくつも交差させた柄で、子孫繁栄の意味があり、めでたいとされている。この子にとってはよそ行きなのだろう。
「来る前に、口入屋の灯庵さんから、ここでの心得を聞かされてきたかしら」
春の花が桃から桜へと移る美しい季節に、野の花の蕾のような女の子を語り手として寄越すとは、なかなか粋である。
「へえ。くれぐれも粗相のないようにと言いつかってきました」
「そんなのはかまわないのよ」
粋と褒めたのは取り消しだ。気が利かない。
「肝心なのは、おつぎちゃんが話したくないことは話さなくていいし、家や人の名前や、場所がどこかということも、伏せておいた方がよければ言わなくたっていいってことなんです」
「へえ……」
今度のへえは、返事ではなく素直な驚きの表れであろう。
「名主様は、おらの村であったようなことは二度とあっちゃなんねえから、い、い、いま」
おつぎが詰まっているので、おちかは助太刀した。「いましめ？」
「あ！　へえ、そうです」
戒める。厳しい教訓の意味の〈戒め〉だ。
「この先のいましめのためにぃ、よぉく聞いていただくのがいいっておっしゃってました」

ふうん――と、おちかはうなずいた。
「でもね、おつぎちゃん。うちで伺うお話は、ここから外には出さないことが決まりなの。おつぎちゃんが語って、わたしが聞いて、それ一回こっきりで、他所には漏らさないのよ」
おちかはもともと、伊兵衛の名代としてこの聞き手を務めているのだから、今日のお話はこんなふうでしたと、あとで打ち明けることになっている。が、それも一回限りだし、話の内容によっては、本当におちか一人の胸の内に隠してしまうこともある。伊兵衛もそれを咎めはしない。
「聞いて聞き捨て、語って語り捨てがここの決まりなんですよ。だから、わたし一人がよぉく聞いても、名主さんがお考えになるような」
――二度とあってはならない。
「この先の戒めにはなりにくいわねえ。これは大事な戒めですよって、触れ回ることはできないから。灯庵さんは、名主さんのそういうご意向を知らずに、うちを周旋してしまったのかしら」
「へえ……そうでしょうか」
可哀相に、おつぎも困っている。
「それとも、灯庵さんのことだから、わたしへの戒めになりゃいいって魂胆なのかな」
おちかの、この先への教訓話。ありそうだ。あの老人はずけずけとものを言うし、とりわけおちかに対しては何かと説教がましい。
「灯庵さんって、むすっとしていてずんぐりしていて、顔の色がどす黒くって、およそ愛想のかけらもなくって、大きな蝦蟇みたいに見えやしない？　うちではあの人のことを、蝦蟇仙人って呼んでいるの」

おちかの言葉はきついが、顔つきも口調も、さもさも悪口を申しますというふうに剽げていたからだろう。おつぎは「えへへ」と笑い、急いで小さな両手を口元にあてた。
おちかも笑った。「可笑しいことがあったら、遠慮しないで笑っていいの。怖かったり辛かったりして話しにくいくだりにさしかかったら、そう言ってちょうだい。しつこいようだけど、おつぎちゃんはここではお客様なんですから」
「へえ、ありがとうございます」
おつぎはまたぴょこんと頭を下げた。
「お話をすると喉が渇くし、だんだんお腹もすいてくるから、お茶とお菓子を召し上がれ」
と言ってみたところで、おつぎはまた遠慮するだけだろう。おちかはまず自分から茶饅頭をひとつ手に取り、真ん中から割った。まだほんのりと温く、こしあんのいい匂いがする。
ふたつに割った片割れをさらにふたつにして、ぽんと口に放り込み、もぐもぐと思案する。
何か手違いが起きているのだとしても、とりあえず、話は聞いてみねばならない。大人の語り手には、好きなところから好きなように語ってもらうのがいちばんなのだが、おつぎの場合はそうはいくまい。こっちから順々に問うていって、話の道をつけていこう。
「おつぎちゃん、歳はいくつ？」
「十三でございます」
「生まれはどこ？」
「鶴見川の北の、小森村でございます」
おちかは口のもぐもぐを止めた。

「まあ。そしたら中原街道の近くでしょう」
「へえ」
「わたしの実家は川崎宿で〈丸千〉という旅籠をしているのだけど、その昔、いちばん始めに、わたしのおじいさんのお父さんが旅籠を開いたのは、中原街道の茅ヶ崎村のあたりだったそうなの」
武蔵国と相模国を結ぶ中原街道の歴史は古い。東海道が今のように整備される以前には、虎ノ門から平塚までを結ぶ大事な道筋だった。中原街道という名称の由来は、権現様（徳川家康）が別荘にしていた平塚の中原御殿である。
「わたしたち、縁があったのね」
言いながら、おちかは自分の茶饅頭をいったん置いた。片手で盆の上から懐紙を一枚取り、もう片方の手でおつぎの右手を取り、掌を上に向けさせる。そこに懐紙を敷き、さらに茶饅頭をひとつ取り上げて載せる。
「はい、どうぞ。おつぎちゃんのおうちは、何をしているの」
茶饅頭をじっと見つめて、おつぎは答えた。
「おとっちゃんは、一のお殿様の田圃の小作人でごぜえます」
中原街道の周辺は、昔から肥沃な土地である。平野ではあるが、谷と谷に挟まれているところも多いからだだっぴろくはないけれど、気候も鶴見川の流れも穏やかで、米がよくとれる。周辺の森や山にはコナラやブナが生い茂り、それを伐り出して薪や炭にする。
そういう豊かな土地だし、大事な血脈の中原街道が通っているということで、そのあたりには

天領と旗本領がたくさん入り組んでいる。戦国の昔から様々な集落があり、耕作が行われていたところを分割したので、ひとつの村にいくつかの旗本領が入り交じっていることも珍しくはない。
今、おつぎが「一のお殿様」と言ったのは、小森村もそういう村で、何人かの旗本が領主として治めているからだろう。
「おつぎちゃんの村には、お殿様は何人おられるの？」
「お三方おられます」
一のお殿様、二のお殿様、三のお殿様だ。もちろんこれは村民たちが暮らしのなかで使っている呼称で、正式なものではなかろうが、ここで話を聞くにはちょうどいい。
おちかの実家のある川崎宿周辺にも、似たような村がある。だからわかるのだが、こういう村にはまず村長がそれぞれにいて、さらにその村をいくつか束ねる立場の名主がおり、この名主が個々の領主に代わって領地を治めているものだ。で、名主は年に何度か江戸にいる領主たちのもとに伺い、作柄だの村の様子だの、細々としたことを報告するというやり方をしている。これは、江戸市中で、地主に代わって差配人があちこちの貸家や長屋の店賃を取り立て、店子の請け人となり、一切の面倒をみる仕組みと似ている。
「小森村の名主さんは、今、江戸にいらしているのね」
「へえ」
「じゃ、おつぎちゃんも、名主さんに連れられて来たんだね」
「へえ。昨日、参りました」
そして、不思議話を聞き集めている三島屋へ行き、村で起きた出来事を語ってこいと命じられ

たわけだ。が、ただ語らせるためだけに、十三の女の子を選んで連れて来るわけはなかろう。
「おつぎちゃんはこれから、江戸で奉公するのかしら」
おつぎは首を横に振った。
「名主様のご用が済んだら、一緒に村へ帰ります」
おや。では本当に、語りのためだけにわざわざ連れて来られたのか。
「おつぎちゃんのおうちには、おとっちゃんとおっかちゃんと――」
「ばっちゃんと兄ちゃんと、妹が二人おります」
「そう。でも、名主さんはおつぎちゃんだけをお連れになったのね」
おちかの不審そうな表情に気づいたのだろう。おつぎは、考え考え言い出した。
「名主様は、村のことぉ、一のお殿様にお話になるんだそうですけども」
領地での出来事を報告するのは、名主の仕事だ。
「うん、うん」
「んなことがあるもんかっていうようなおかしなお話だからぁ、名主様が申し上げても、一のお殿様が信じてくださらねえかもしれなくてぇ」
ははあ。
「そんときはおらが、えっとぉ――」
おつぎはさらに一生懸命考える。名主に言われたことを思い出そうとしている。
「いき、生き、いきしょうにん？」
「わかった！　生き証人ね。おつぎちゃんが、名主様のお話を裏付ける証になるという意味よ」

「あ、へえ、そう、かなあ」
おつぎは頼りなさげに首を傾げながら呟き、小声で付け足した。
「あのお化けどものこと、すっかり見てたのは、おら一人だけだから」
あの、お化けどものこと。
おちかも聞き手を務めて慣れてきたから、こういう言葉が出てくるとぞわりとする。怖いのではない。興趣がわいてくるからだ。
「けども、おらがうまくお話できるかどうかわかんねえから」
十三の女の子の話は拙いだろうから、
「どこぞでおけいこせんといかんなあって。村のこと、何も知らねえお人が聞いてもわかるくらいに。それで、灯庵さんに持ちかけてぇ」
なるほどなるほど、こんがらがっていた糸がほぐれて、おちかにもわかってきた。
名主が「よく聞いてほしい」と言っているのは、べつだん、世間に広く聞いてほしいという意味ではないのだ。一の殿様を始め、小森村の領主たちに聞いてほしい。とっくりとわかってほしい。そっちの意味なのである。
しかもそれは「この先の戒めになる」大切な話だ。生き証人のおつぎにもしっかりしていてもらわないと困るから、下稽古が要る。そこで、三島屋に白羽の矢が立ったのである。
「これは見込んでもらったものだわ」
何だ、蝦蟇仙人。わかっているじゃないか。おちかも調子がいいといえばいいが、腕まくりしたい気分になってきた。

「そういうことなら、わたしはお稽古の相手にうってつけだと思うわ。さてどういうふうに始めるか、ちょっと考えてみますからね。おつぎちゃんはお饅頭を召し上がれ」
「へえ！」
やっとこさ、おつぎは茶饅頭にかぶりついた。
今回は、話したがらない者の口を開かせるのではない。話したがってはいるが、話が下手な者の口を調(ととの)えるのでもない。話を抱えているが、それをどう語ったらいいかわからず、言葉もそんなに多くは知らないだろう子供が相手だ。
あの、お化けども。
やっぱり、そこから行くか。的の真ん中を射(い)て、どんなものでできている的なのか、感触をみてみよう。
おつぎは、湯飲み茶碗(ぢゃわん)を両手で捧(ささ)げるようにして茶を飲んでいる。行儀のいい子だ。
空になった茶碗をその手から受け取り、盆の上に戻して、おちかは切り出した。
「おつぎちゃん、さっき〈お化け〉って言ってたよね」
甘い物にとろけていたおつぎの顔が、つと引き締まる。
「へ、へえ」
「それ、どんなお化けだったのかしら。おっかない姿をしていた？」
おつぎは目をぱちぱちさせた。
「うん……と」
そして小さな声で、「ひとです」と言った。